

普遍的共同感情について

— やさしさ —

中野 貴仁*・莊司 泰弘**

Algemeine Gemeingefühl
— über Freundlichkeit —

Takayoshi NAKANO*・Yasuhiro SHOUJI**

キーワード：アニミズム、共感、やさしさ、模倣遊び、仲間関係、部分的共同感情、
普遍的共同感情

1. はじめに——私は、大学、大学院と幼児教育を学び、幼稚園に実習生として保育に携わり、実習期間中においては、より近くで子ども達と接してきた。幼稚園で子ども達と一緒に遊び、遊びを通して子ども達との関係を築いてきたので、子ども達の活動を直に見ることができた。子ども達は、自分自身を模倣遊びに反映し、遊びを展開しているということが分かった。子ども達の模倣活動は、絶え間なく変化をくり返すことによって、普遍的共同感情を持ち、仲間関係を形成していくと考えた。したがって、私は、子ども達の模倣活動が、幼児期の子ども達にとっていかに大切な事柄であるかを示し、子ども達の模倣活動がもたらす普遍的共同感情について考察し、仲間関係の形成による子ども達の内的心情を述べていく。

2. 子どもの模倣活動の意義——子ども達の模倣行動である「ごっこ遊び」(Imitieren das Spiel)、「アニミズム」(der Animismus)に関して、幼児教育学と発達心理学では見解を異にしている。発達心理学において幼児期の模倣行為は、感覚が未分化なために生じる錯覚であるとされる。同様に、同一視、相貌的知覚、自己中心性、アニミズムなども望ましくない未分化傾向であると考えられ、早く感覚を分化して未分化様態を脱することが必要な時期と考えられている。五感(視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚)の未分化状態を一早く脱させるために、心理学では、人間の各感覚に分離し、分化状態への人間の機能的訓練を重視し、個別にして強化を行っている。発達心理学と幼児教育学における未分化状態に関する4つの項目の相違を述べておく。特に、幼児教育学は事例をあげて述べておく。

「同一視」(die Gleichsetzung)は、「精神分析学者フロイト(Freud.S.1935)によって提唱された概念で、子どもが同性の親のもっている性格や行動特性などを自分に取り入れる無意識的過程をいう。フロイトの同一視説には、子どもが生来的にリビドー(広義の性エネルギー)をもつこと、異性の親に特殊な性的愛着をもつこと、異性の親の愛情を一層得ようとして、ライバルである同性の親(この関係をエディプス・コンプレックス、エ

*山口大学教育学部大学院生 **山口大学教育学部

レクタラ・コンプレックスという)と同一視し、同性の親にあやからうとする、という一連のプロセスが前提として含まれている。フロイトは、この同一視を通じて、子どもは親から自己の性の役割を取り入れ、また親の罰を内在化することによって、良心、超自我が獲得されるとして、人格発達の基礎をつくる過程として重要視されている」^(1-a)と考えている。

《事例》最近、ポケットモンスターが幼稚園の子どもに大人気である。子どもは、ポケットモンスターごっこをするときに、「自分は、主人公役のピカチュウだ」といって、喋る言葉もピカチュウのように喋っていた。また、ポケットモンスターごっこに参加した別の子どもは、他のキャラクターになり、一緒に遊んでいた。

事例から分かるように、子どもは、動物、植物などあらゆるものに、自分をみたく対象物に同一視すると言える。発達心理学において同一視している対象は、人間に限定されるが、幼児教育学では、同一視の対象が人間だけに限られて考えられていない。

「相貌的知覚」(physiognomische Wahrnehmung)は、「主として幼児や未開人の事物や自然に対する認知様式の特徴を示すものとしてウェルナー (Werner, H.)により提唱された。ウェルナーによれば、幼児の知覚世界はきわめて情意的・表情的であり、事物はすべて『相貌的』(physiognomisch)なものとして知覚される。しかも、これは人と事物とを区別した上で物を人物的にとらえる『擬人化』とは異なり、主客の未分化性から来る知覚そのものの特質である」^(1-b)と考えられている。

《事例》幼稚園で、強く風が吹くと草木がゆらいでいた。その状態を見ていた子どもは、「草木が騒いでいる」や「木がお化けに見えた」などと言っていた。

事例から子どもは、シミが蝶にみえたり、人間に見えたり、錯覚とはとらず、客観的知覚の子どもの特徴として表している。発達心理学において、相貌的知覚は、未分化状態における子どもの錯覚について述べているが、幼児教育学とは、見解が異なっている。

「自己中心性」(Egozentrismus)は、「ピアジェ (Piaget, J.)が子どもの思考や社会性の特徴を説明するために用いた用語。幼児は幾つかの視点を同時に統合することが難しく、外界の認知において、自己の視点に中心化して物を同化し、自己の視点から脱して(脱中心化)他者の視点から自己や物をとらえることが困難な特質をいう。したがって、思考においても、対人関係においても、自己を客観的に定位することが難しい」^(1-c)と考えられている。

《事例》幼稚園で、子どもが跳び箱を一生懸命飛んでいた。ある子どもが、「もう4段飛べるから、跳び箱を5段にして」と言ってきました。しかし、他の子どもは、4段を飛ぶことが精一杯で、5段を飛ぶことはできなかった。

事例から子どもは、ただわがままを言っているように見えるが、5段を飛びたい子どもは、自分の可能性を一生懸命引き出していると考えられる。つまり、子どもの持つ独特の個性を外界に表現していると考えられる。発達心理学において、自己中心化は、子どもの未分化な状態として、人間の未発達な意味としてとらえられているが、幼児教育学においては、発達心理学のように偏った見解をしていない。

「アニミズム」(der Animismus)は、「ピアジェが、幼児は生命体、陽生命体を問わず、様々な事物や事象にも生命があり、人間と同じように心(意識や感情)を持っていると認識している。これは、客観的な事象に主観性を当てはめている点で、幼児の持つ自己中心生の一つの表れであると考えられる」^(2-a)と保育用語辞典に記載されているが、

発達心理学の見解である。

《事例》幼稚園で、飼育小屋に行ってみると、子どもが、うさぎに話しかけていた。子どもが、「今日は、元気」となどと言っていたら、同じ子どもから「元気でしたか」という言葉が出てきた。おそらく子どもは、うさぎからの返事を感覚で感じ、言葉にして発していると考えられる。

事例から子どもが、当たり前のように動物から返事があったと感じ喋っていたと考える。つまり、子どもは、動物が言葉を喋ると思っている。したがって、子どもは、動物が言葉を喋る、草木が笑っているなどのアニミズム傾向を見せるが、子どもの日常活動の一つだといえる。発達心理学では、未分化状態の自己中心性の一つの特徴としてアニミズムがあり、子どもの発達上では、当然おこる状態をととしてとらえてはいるが、発達上未熟な特徴としてとらえられている。しかし、幼児教育学とは異なった見解をしている。子どもの模倣遊びは、表情、身振りなどの身体を十分に使って相手の子どもと意見を交換できると考えられていることになる。つまり、模倣遊びは、子どもの仲間関係に深く関わり合っているわけである。

すべての項目について発達心理学においては、幼児に五感の未分化状態から早く分化した状態になることを望み、未分化な状態を否定的にとらえられているが、幼児教育学においては、幼児は、五感が総合化した状態として理解し、未分化な状態ではないとして肯定的にとらえている。つまり、幼児教育学における「模倣活動」(Imitatieren das Spiel) に関しても、単なる外界の行為を模倣し表現するだけの表面的な特徴を持った行為ではないといえる。模倣行為の「ごっこ遊び」(Imitatieren das Spiel) は、保育用語事典によると「子どもが見たり聞いたり経験した事象を、表情、身振りを使って役割を取り、あるいは身の回りのいろいろなものを見立てるなどして一つの一貫したテーマに組み立てていう象徴的な遊びのこと。通常、一歳の後半から出現し幼児期に最も頻繁に現れ、言語習得後の児童期に消滅していくことが明らかにされている。また、二人以上の子どもが、いっしょにごっこ遊びをすすめる場合、ごっこ遊びで使われる表情、身振り、あるいは筋の運びに関して一定の共通ルールがもとめられ、これを取り決めるために相互に意見を交換できることも、この遊びをすすめるための条件となっている」^(2-b) となっているが、発達心理学的な考えである。幼児教育学では、見解を異にしている。フレーベル (Friedrich Froebel 1782-1852) が、「子どものうちにあるすべての活動の根源は何か。それはまさに生命である。生命は、神のうちにありすべての現存在の第一原因であるからだ。それゆえに子どもは、彼の眼に入るすべてのものを生命づけようとする。すなわち子どもはすべてのもののなかに生命を予感したり、感じたり、知覚したりするだけではなく、さらにすべてのものに、意識的な生命や意志、意識的・自己決定的な意志があるとみなしさえするのである。すべての事物が自己決定的な神の意志、万物の第一原因の意志からあらわれてきたように、また生命や生命をもつもの、生命を包みかくしているものが神からのみあらわれてきたように、子どももまた彼を取りまくすべてのもののなかに、生命のいない手や秘められた生命を見たり、予感したりするのである。この点に、子どもの活動における彼とその第一原因との、すなわち万物の創造者である父との近親関係がはっきり示されている。」^(3-a) と述べているように、子ども達の模倣活動は、神から授かった生命の表現であるといえる。

発達心理学と幼児教育学の見解の違いは、感覚を分離して考えるか、子ども達自身の持つ

ている総合的感覚として考えるかの立場の相違にある。五感を融合した第六番目の総合的知覚力「直観」(die Anschauung)が幼児期の特色として発揮されることから、発達心理学の観点は表面的な子ども理解と言えよう。すなわち、発達心理学のように感覚を分離して訓練しようとする発想は不自然なことであり、逆に、感覚が融合している状態こそ幼児期の合自然的発達状態であると考えられよう。

「合自然性」(die Naturgemäßheit)とは、有機的自然観に基づいた幼児教育学の発想で、発達心理学のアニミズム観とは異なり、深層心理学者ユング(Carl Gustav Jung 1875-1961)の「原始心性」(primitiv das Gemüt)という概念に類似している。原始心性とは「幼児や未開人に認められ、われわれ文化社会の平均的成人とは異なる一見、非合理的、前理論的、神秘的な特異の心性。幼児と未開人にはこのような共通の心性が認められるが、その本質は決して同一ではない。①知覚-表象が未分化で一体化してしまう。複合性 ②全体のなかで部分を分節的に把握できない混沌性 ③感情の強力な関与の3つをあげている。・・・幼児のそれは子どもから大人への発達過程における一過的過渡的現象ととらえられるのに対し、未開人のそれは、社会的文化的に強く規定された彼らに特有の一種固定的な行動様式と考えられる」^(4-a)と説明されているが、未開人は差別用語であるため、後社会人と訳すことが適切であると考ええる。

幼児教育において、ユングが述べた原始心性と類似しているのは、「自然有機体」(der Naturorganismus)の概念である。自然有機体とは、「あなたが外界でたくさんのものを生き生きと結びつけた時、何を見つけましたか様々なものが密接に結びつき、ばらばらのものが合意したことを見つけたでしょう。あるものは他のものための発展に役立ち、一方は他方を助ける支えとなります。生命は全て一人の神が与えたもうたものだから、万物の中には1つの生命が作用し、1つの生命が万物を創造したからなのです」^(5-a)というフレーベルの有機的自然観であり、幼児期の合自然的発達状態を擁護する見解と言えよう。幼児教育学において、生命は神から授かったものであると考えられ、子どもの模倣活動は、神が万物を創造した行為の模倣であるため、必然的に子どもの模倣活動には創造的、建設的要素が伴うことになる。

聖書によると神は、人間を「天地の創造」から6日目に誕生させた。

「神は言われた『地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれ産み出せ。』そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』神は、御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」^(6-a)と言い伝えられている。神は神の創造行為によって作品である人間を創造された。したがって、芸術家の精神が作品に反映されるように、神の精神が人間に反映されていることになる。キリスト者フレーベルが、「子どもと神との本質的な近親関係を示す事実的な証拠はますます増加する。すなわち、子どもは、自分を取りまいている対象物において、その対象物を自分に関係させ、自分を対象物に関係させるやいなや、それに生命を予感し生命を想像するだけではなくて、子どもの生命や内的なものからあらわれてくるものはすべて、直ちに、完結した形、生命をもつ形をとるのである。このようにして子どもは、対象物のなかに小猫や小ねずみや小鳥や小魚などを見る。小羊が白い小石であらわされるかと思えば、白い豆であらわされたり、柳やポプラのつぼ

みであらわされたりする。細い棒は樹木の表象を実現するし、木片などは人格体になる。いな、自分の指さえも自分から離れて、それぞれ違った子どもになったり、小魚になったり、小鳥になったりなどする。こうして子どもは絶えず全体生命だけを自分のうちにもち、そしてまず第一に、絶えず全体生命を自分の外の対象物に表現する。神なる創造者の存在・生命および活動から現存在にあらわれてきたものはすべてみな、大なる宇宙生命の一つの部分的全体であるからである」^(3-b)と子どもと神との本質についてフレーベルが記しているように、神なる創造者の存在および生命と考えられている万物は、絶えず内的なものを他の万物に表現し存在している。つまり、子ども達も神の創造者の存在および生命と考えられ、模倣行動などによって外の対象物に内的なものを表現し存在すると考えられる。したがって、子ども達の模倣活動は、全体生命の部分である自己の確認行為と考た。フレーベルが神と子どもの関係、子どもの模倣衝動の意味を説明しているように、神にかたどって創造された人間には、神と同じ創造行為の模倣を行う使命を伴っている。すなわち、子どもの模倣活動は人間の使命を果たす行為として理解される。ゆえに、模倣活動の本質は自己と生命との関係の確認に他ならない。神の創造活動には対立物を設定し、融合することで止揚させるという傾向があり、自然界において対立する事物を調和発展させる活動であったことに着目したフレーベルは、神の作品である人間には神の精神活動が反映されていると確信した。したがって、模倣活動には対立物を調和する方向性が要求される。対立物を調和する方向性によって、模倣活動は子どもの比較や判断推理という認識への道が開かれる。「こうして子どもは絶えず全体生命だけを自分のうちにもち、そしてまず第一に、絶えず全体生命を自分の外の対象物に表現する。神なる創造者の存在・生命および活動から現存在にあらわれてきたものはすべてみな、大なる宇宙生命の一つの部分的全体であるからである。子どもというものはのちに、彼のうちにものを吟味する悟性がますます発達し、また同様に人間および子どもの創造的な力と創造する力もそれだけ増し、より自発的なもの、より自由活動的なものに発達して初めて、ものを比較したり分離したりするものである」^(3-c)とフレーベルが述べているように、模倣活動は人間が人間社会を形成するために必要な「部分的全体」(das Gliedganze)の発想を子どもにもたらず遊びと言えよう。

部分的全体とは、「全体の中にあるものは、全体の最小の部分にも同じようにあるということ、全体としての人類の中にあるものもまた、最も幼い、最も若い人類の、子ども達の中にも既にあらわれているということ」^(3-d)とフレーベルが確認しているように、神の創造した「大宇宙」(Macrokosmos)と同等の「小宇宙」(Microkosmos)が人間に内在しており、大宇宙と小宇宙は有機的に関係し合っているとする発想である。一人の人間は、家族に属し、家族は、地域に属し、地域は、国に属し、国は、世界に属し、世界は、神の創造に属していると考えられることから、すべての万物は、神の創造をもとにした部分的全体として一個の宇宙生命体を構成していると考えられる。人間の身体細胞は固有の者であり、一つとして不用な細胞がないように、万物にも不必要なものは存在しない。すなわち、フレーベルの仲間の概念は有機的な発想を基盤としているのである。

自然有機体の概念を人間の身体を例にとると人間は、手や足、頭、腕などで構成されており、すべての部位は、血液で結びついている。自然有機体も各事物で構成されており、万物は神の精神が宿っている。部分的全体においても同じことが言える。部分的全体は、一つ一つの万物から全体を構成しており、すべての万物を結びつけているのは、共同感情である。つまり、自然有機体の概念と部分的全体の発想は、集合生命体という観点から類

似している。

「私自身は部分的全体であり、人類という全体生命の部分なのです。私は人類の部分的全体であり、だから、私は人間であり、完全な人間なのです。ツボミに樹木の本質の全体性と樹木の発展の全体性があるように、私は人類の生命樹のツボミなのです。私の本質を形成し、私の中にも息づいている全体生命のように、私は私ですが、孤立してはいないのです。だから、私の最内奥の本質としての全ての生命を私の中から外へ生かすことが私の指命なのです。しかし、私は全体の部分でもあるから、私は部分であると同時に全体であり、人類の部分的全体であり、したがって、私の生命は完全な生命なのです。だから、私の中で人類の完全な全ての生命を私は生き、私は完全に生命に満ちた人類を生きるのです」^(7-a)とフレーベルが述べているように、万物一つ一つが不可欠であり、全体を作っている一部として不用なものはない。自然有機体は合意のもとにまとまっている。人と人をまとめるのは、自然有機体では、合意という生命の活動で述べられており、部分的全体では、共同感情という生命の活動によって結びついていると言える。

3. 部分的共同感情——フレーベルの部分的全体の概念と子どもの共同感情の関係をもう少し押さえておくことにする。フレーベルによると、人間が部分的全体存在である確認として、子どもに現れる感情表現が微笑であり。子どもは、微笑によって初めて人間存在を確認するとされている。子どもの微笑は、単に自分自身の自己表現だけではなく、人間の真価、人間の本質を現すものと考えられ、子どもが、自己意識の人間段階に入っていくことを意味している。つまり、自己意識に目覚めた子どもの微笑は、他の人に自己を理解させるための行為であり、他人から自己を理解してもらおう行為と考えられる。子どもの微笑の意味についてフレーベルが、「最初の微笑の出現によって人間の子は直ちに他の全ての被造物から区別される。最初の微笑は、自覚の人間段階、自己意識の人間段階に入ったことを示すものであり、最初の微笑は、人間の真価、人間の本質を示しているからです。だから、微笑は決して単なる身体的な無事息災の表現、肉体的な満足の表現だけを現すものではない。自然界や人間に飼われている被造物の子もまた、周知のように身体的な無事息災の感情、肉体的な満足の感情を有してはいるが、人間本質の高尚で高貴な表現、微笑が欠けているからです。しかしながら、(微笑についてのことは高度な配慮と展開に値する) まだものの言えない、他にほとんど何らの表現も持たない子どもとしての人間は、微笑を通して初めて、自覚の程度はともかくとして、既に自覚している周囲の人達の精神、まず第1に両親、母親と相互交流するようになり、初めて結びつくのです。微笑は、子どもの微笑は、自主性の表現であり、少なくとも自己意識の段階に達している人間精神の現れなのです。最初の微笑、子どもの微笑は他の第2の人間存在に自己を理解させることができることの現れであり、他人から理解してもらえということなのです」^(8-a)と述べているように、子どもが人間の使命を自覚していく発端といえるであろう。子どもが人間の使命を自覚し、自己を部分的全体の中に確認する時に、対立物の調和という人間の使命を理解できるようになる。対立物の調和という神の精神活動は、万物すべてが持っている共通の憧れであり、対立調和するために万物は、「生命合一」(die Lebenseinigung) したいという感情を共有することになる。神との生命合一を求める憧れをフレーベルは共同感情として理解している。つまり、子ども達は、微笑を通して、全ての創造物との有機的生命関係を確認しているのである。フレーベルの言う生命合一とは「万物のなかに神的なも

の、神が存在し、作用し、支配しており、万有は神的なもの、神の中に存在し、生き、存続している」^(9-a)のために、万物には神に帰一しようとする憧れが先天的に内在し、生命の源である神に向かおうとする傾向になる。万物が神に向かおうとする傾向をフレーベルは生命合一傾向と呼んだわけである。万物に共通する生命合一への憧れという感情は、子ども達の共同作業衝動に強く表現されている。

《事例》 ある子どもAくんが砂場において、砂山を作り始めた。最初は、Aくん一人で手を使い砂を集めていたのが、他の子どもBくんが、砂山を作るAくんを見て、自分も砂山を作りたいと思い、最初に砂山を作っているAくんの所にスコップを持って来て、AくんBくんと一緒に砂山を作り出す。ここで最初に砂山を作っているAくんに仲間が一人増えてきたと考える。また、同じように砂山を作りたいという別の他の子どもCくんが、バケツを持って来て、スコップで砂をバケツに集め、砂山をより高く完成していく。作っている途中で子ども同士がどんな砂山にするかを話し、再検討しながら砂山の形を決定していく。最後的には、砂山作りに使っていたバケツに水をくんで来て、砂山の麓に水を流し、子どもたちが求め望んでいた砂山が完成した。

事例は、共同感情を表した事例である。それぞれの子ども達の想いを基に遊びを広げ、砂山の完成に至った。しかし、共通して「砂山作り」という目的があり、子ども達がアプローチ方法を考え、砂山を完成へと導いた。子ども達には、共通の感情が存在していたと考えられる。子ども達は、砂遊びという共同作業によって体験を共有し、共通の感情を確認し合うことで、初めて共同感覚が生じる。お互いの存在を自覚し、様々な共同感覚の確認を継続することによって共同感情をもつことができると考えられる。

部分的全体が結びつき、部分的共同感情の流れを生みだすならば、お互いを認識しあった共同体が存在してくる。ならば、部分的感情により人間的結びつきをもった共同体において、人間は、お互い理解し合うシステムを生みだしていく。

「共同体は理解を引き起こし、共同体は理解を伴う。共同作業の中で、群れは自分をつ一つの共同のものを感じる。共同作業の中で、群れの構成員は個人的に、相互理解に至る。統一性を表現する共同作業において、群れは自分を統一性として共通に感じる。そのような共同作業は、ただ単に相互理解を直接に引き起こすばかりでなく、自己理解をも引き起こすのです。この全体の統一性と本質を自らのうちに感じる時、自分自身の本質、自分自身の統一性を感じ、認識する時、統一性として全体を共感できるからです」^(9-b)とフレーベルが述べているように、部分的共同感情によって、お互いの存在を認める「共有感覚」としての「共感」システムが生まれてくる。子どもに先天的に共有感覚があるからこそ、共感が生まれ、共感体験の積み重ねにより、共同感情が定着する。われわれが取り上げる「やさしさ」は共同感情の一部なのである。

4. 共感——共同感情は、われわれの中に生得的に存在すると考えられる。つまり、子どもが身近な人間とお互いの感情をふれあわすことによって、共有の感情が生まれ、共有した感情をもってお互いが共鳴し合い、より高い精神統合をしていくこととなる。最終的には、共有の感情が周辺の人々に広がっていき、人類、さらには、神との共有した感情のつながりとなっていく。フレーベルが、「児童が初めに母と、また父と、および兄弟姉妹と一致結合するところの、共通的な、または共通性の、この最初の感情には、その根底に、より高き精神結合がある。後に児童の心に、父母兄弟姉妹、人々がみな、あるより高きも

の一すなわち人類、またはさらに進んで神と、共通し一致しているのを感じこれを知っている、という疑うことのできない自覚が起ってくるもの、一にかの精神的統合によるのである。この共同感情は、真の宗教心の萌芽であり、永遠者すなわち神と全く結びつこうとするすべての純なる努力の最初の発端である。危険の時にも苦闘の時にも、苦痛や窮乏の折にも、また歓喜の場合でも、つねに頼りになる真正の生ける宗教は、すでに人の幼時期から始まらなければならない。つまり、有限のものすなわち人間の中にあるものとして現れてきたる神性は、すでに人間の幼少の時から、己が神より出でたるその関係をば、おぼろげながら予感的に識っている。それだから、このおぼろげな予感、灰黒色の意識というよりもなほおぼろげなこの意識を、早くから児童のうちによく保護し、強めかつ養って、それが後に明瞭な意識と高められ純化されるようにしなければならない。」^(10-a)と述べていることは、子どものやさしさが先天的感情であることを裏付ける内容であると言えよう。

どのようにして子ども達は、共同感情によりやさしさを表現していくのだろうか。事例をあげて考察する。

《事例2》砂遊びをしている子どものことを考えても同じように感じられるだろう。ある子が砂遊びをしていると、別の子どもが「よせて」と言って集まってくる。最初に遊んでいた子どもは、「ええよ」といってその子と一緒に砂遊びをし始める。「よせて」・「ええよ」をくり返して、一人から始まった遊びは、次第に子どもが集ってきて、最後には、四・五人で砂遊びし、砂山や川などを形作っていった。

子ども達は、砂山遊びを通してお互いを認識し、砂山を作る作業過程は異なっているが、共通の感情を持って砂山を作り、お互いが同じ遊びから同じものを作っている。つまり、共通の感情を持ち、受け入れ、相互の関係をくり返しながら、砂山遊びをしていたという共有感情を作り出すと考えられる。子ども達同士が、仲間意識に「入れる」というやさしさの感情を持ち得たとき、子ども達同士は、初めてお互いの共有した共同感情の表現及び受け入れをできる状態になり、共感しあえるようになる。したがって、砂山の事例のように、生得的な共同感情をやさしさという概念に発展させる環境が必要なのである。

幼稚園にいる子どもは、3歳から5歳までの子どもが、同じ建物の中で、同じ場所、同じ時間を共有している。子ども達は、自分のクラスの子ども以外は、知らない子どもがたくさんいる。しかし、子ども達は、お互い一緒に同じ場所で生活を過ごしている。子ども達が、お互いに同じ場所で生活を共有しているということは、保育士という生活経験が豊かな人が存在するからではない。保育士というのは、子どもの身体的な面、精神的な面を支え、子どもへの援助を施す存在ではあるが、子ども達の生活そのものを管理し、運営しているものではない。幼稚園は、子どもたち自身が持つ特徴（部分）によって、幼稚園（全体）を作り上げていっているのである。子ども達は、異年齢同グループの構成により、年長の子が年少の子にたくさんのことを伝え、教えていくシステムによって、幼稚園全体の雰囲気子ども達自身で築き上げ、生活を送っている。また、幼稚園での生活は、子どもたちが作り出した雰囲気と環境など、さまざまたくさんの要素によってを毎日の生活を築いていっている。子ども達は、子ども達同士で小さい枠（一部分であるが）の中はあるが、無限の可能性を秘めた園内で全体を作り上げたい。幼稚園のことをもっと大きな枠で考えると、人類もまた神の創造の一部として、地球という大きな無限の可能性を秘めた中で生活を送っていることになる。つまり、子ども達は、幼稚園という部分的全体の中で、感覚体験を繰り返し送りながら共同感情を持ち、共有生活を作り生活を送っている。

すなわち、共同感情による感覚共有体験を幼稚園という場所で繰り返し行っていくことによって、子どもの中にやさしさが表現されている。もし、園内で感覚共有体験をできなかったならば、幼稚園において共同感情は、生まれてこず、子どもが持ち得ていたやさしさが表現されない環境ができてしまう可能性が出てくる。ゆえに、幼稚園では、子どもが、神の創造行為の模倣を行う使命を表現するために、自由教育の理念をもとに、異年齢同グループの生活状態を形成させ、子どものありのままの本質を表現させている環境を設定している。したがって、自由教育の理念をもとにある幼稚園では、生得的な共同感情をやさしさという概念に発展させる環境を持っていると考えられる。

5. 普遍的共同感情——人間は、神の作用によって生得的に共同感情を持ち、人は他人と感覚体験をくり返すことによって共感し、互いに感情の交流を交えながら、共有する生活環境ができるのである。共有する生活環境の中でも神の愛の作用が働き、やさしさを表現すると考えられる。人間は、神の創造行為の模倣を行う使命において、やさしさは、神の創造行為の愛にあたるものと考えられる。キリスト教における愛 (Agape) は、「アガペーは他者本位の純粋な愛である。他者本位であれば、必ず自己犠牲的、自己否定的とならざるを得ない (ルカ 6 : 32-34)。このようなアガペーはイエス・キリストにおいて現実化している。神がその独りの子キリストを世につかわし、彼を十字架に死なせたことの中に、怒りの対象である罪人を愛する神の自己犠牲的愛を示そうとする (ヨハ 3 : 16, ロマ 5 : 6-10) ここに、メシア思想が<苦難のしもべ>と結合するに至った。しかし、新約においては、この自己犠牲的な愛が決して妥協的なものではなく、他者たる人間の現状を変革する勝利の愛であることが示される (ピリ 2 : 9-11)。この愛の勝利の具体化がイエス・キリストの復活と、復活者の霊としての聖霊 (ヨハ 20:22) のわざである罪人の聖化である。神におけるこのような愛の構造が、人間に対する倫理的戒めとして展開される。創造において示されたような、純粋に与える愛が、自己中心的な愛に対比され、全心全霊をささげて他者たる隣人を愛することと、自己を愛するように真実に他者たる隣人を愛することが、戒命の総括として示される (Iヨハ 3 : 16)。そして、キリストの死にならってこのように自己を放棄することが、キリストの復活にならって自己を獲得することになる (マタ 16 : 25)』⁽¹¹⁻²⁾と述べられている。キリスト教における愛は、他人本位の純粋な愛とされ、全身全霊をささげて他者たる隣人を愛することと解釈される。人間は、神の創造行為によって神から生命と共に愛も受けついでいると言って過言ではない。つまり、大人から子どもまですべての人々に「愛」(die Liebe) は、生得的に人間の中に宿っていると考えられ、神からの愛によって人間は、他人に愛する感情がやさしさという感情で表現しているといえる。

《事例》 山口市道場門前の前にあるNACコミュニティ・ホールにて、全国学生クリスマス献血キャンペーンが行われた。冬場における献血者不足解消、一般の方へ献血の普及といった目的を持って献血活動を行っていた。

献血活動に関わっている団員は、血液は人工で精製することができず、人が持っている血液でしか輸血はできないということ、病院において輸血用の血液を待っている患者がいるという事実をもとに、より多くの安全な血液を確保し、多くの患者の命を助けていこうとしている。共同作業の献血活動を行っている団員の間には、献血の目的、献血の活動の意義が内的深層にあり、自分のためではなく他人のために、やさしさを持って献血活動に

携わっていると考えられる。ボランティアは、人々が共有の感覚体験を繰り返し行ない、他者に対するやさしさの共同感情を持ち、仲間関係を形成していく。また、幼児期の子どもにおいても同じように、感覚体験を行うことによって感情の共有を促し、共有体験の積み重ねによって共同感情を持ち仲間関係を形成していく。仲間関係が形成されると、子どもは、お互いのことを考え、やさしさを見せる。ついには、子ども同士によって自分たちの世界における秩序を形成していくと考えられる。つまり、やさしさは、子どもの仲間関係を形成する上で、とても大切なものであることが明らかであり、保育士は、子どものやさしさを表現する環境を援助していくことが必要である。

いつの時代、時期であろうとも人間は、生得的に神の作用を受け、子どもから大人になっても変わらない共有の感覚体験を繰り返すことによって、共同感情を生み、いつも変わらなくわれわれの中にやさしさを存在している。ゆえに、やさしさは、「普遍的(algemeine)」なものであり、人間の中に生得的に内在しているいえる。

6. おわりに——私は、今回のセンター紀要において、子どもの普遍的共同感情であるやさしさについて論じてきた。子どもにとってやさしさは、人間関係を形成する上で大切な要素であるという結論に至った。子どもの大切な要素であるやさしさは、子ども同士によって生まれるものではあるが、保育士は、子どもがやさしさを表現できる環境をうまく援助していくことが大切である。それゆえ、子ども達だけにやさしさを求めるだけでなく、保育士自身がやさしさを最大限に表し、子ども達に生き様を示していくことが大切である。生活の中で他人（相手）に対し、常日頃から自主的にやさしさを持って接し、人間味のある生き様を表しておく必要がある。

人間の普遍的共同感情として「やさしさ」を子ども達に求めるためには、保育士自身も人に対してやさしさを持って接するという行動が伴わなければならないのである。

引用・参考文献

1. 新・教育心理学事典 依田 新 監修 金子書房 1997年6月10日
a. pp.589-1項 b. pp.525-2項 c. pp.316-2項
2. 現代保育用語辞典 岡田 正章・千羽 喜代子他 フレーベル館 1997年2月3日
a. pp.18 b. pp.155
3. 『幼稚園教育学』 フレーベル全集(4) Fröbel. F 小原國芳・莊司雅子 監修
玉川大学出版部 1981年4月8日
a. pp.679.L3-7 b. pp.679.L8-16 c. pp.679.L17-pp.680.L12 d. pp.503L14-L16
4. 教育・臨床心理学辞典 小林 利宣 編 北大路書房 昭和55年10月1日
a. pp.153-1項
5. 『教育の弁明』 フレーベル全集(1) Friedrich Fröbel 小原國芳・莊司雅子 監修
玉川大出版部 昭和52年6月1日
a. pp.254 L1-7 b. pp.436 L14-pp.437 L4
6. 聖書 新共同訳 日本聖書教会 1997年
a. pp.2-24-27項
7. 『教育論文集』 フレーベル全集(3) Friedrich Fröbel 小原國芳・莊司雅子 監修
玉川大学出版部 昭和52年12月1日
a. pp.524 L10-pp.525. L 2
8. Friedrich W. A. Fröbel
Das kleine Kind, oder die Bedeutsamkeit des allerersten Kindesthuns
In: *Die erziehenden Familien. Wochenblatt für Selbstbildung und die Bildung Anderern* Nachlaß Friedrich Fröbel 105
Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR
Der allgem. deutschen Erziehungsanstalt in Keilhau
Sonabend~6~den 11. Februar 1826
a. S.83.Z.13-S.85.Z.15
9. ペスタロッチー・フレーベル事典 ペスタロッチー・フレーベル学会
発行所 玉川大学出版部 1996年12月25日
a. pp.166-2項
10. 『人の教育』 フレーベル全集(2) 小原 國芳 訳 玉川大学出版部
昭和51年9月20日初版発行

a. pp.34 L16-pp.35 L9

11. キリスト教大辞典 日本基督教協議会文書事業部 キリスト教大辞典編集委員会
教文社 昭和38年6月30日発行

a. pp.11項